宝石

私の前に
意力も視力も失ひながら
ぼんやりと天を見つめてゐるお父さん
あなたの肉体が
もう私には　かさかさした
茶色い紙の集りのやうにしか思はれません
あなたの肌は羊皮紙のやうです
きざまれた皺も文字として
息子である私にはわかるやうな気がいたします
たくさんの苦悩が書かれてゐる事も想像出来ます
しかしそれらに含まれて光るものがあります
あなたのお心の姿が
いまこそ私に迫ります
年月にみがかれた
小さい小さい宝石
わたしにはそれだけで充分です
お心まで私を去ることのありませんやうに